Sliding posterior tongue flap で再建した舌癌の1例

北村 圭司・山本 学・澤渡新太郎
森 光伸・山口芳功・吉武一貞

Application of a sliding posterior tongue flap for
reconstruction in a case of squamous cell carcinoma of the tongue

Keishi KITAMURA・Gaku YAMAMOTO・Shintaro SAWATARI
Mitsunobu MORI・Yoshinori YAMAGUCHI・Kazusada YOSHITAKE

Key words: tongue cancer (舌癌), sliding posterior tongue flap (後部滑走舌弁)

緒 言

舌癌は口腔癌の約52%を占め¹⁾ 比較的、発生頻度の高いものである。舌は咀嚼運動、発音および構音に大きく関与することから切除後の修復・再建には大きな配慮が必要となる。今回舌縁部に発生した扁平上皮癌に対し、Sliding Posterior Tongue Flap を適応し、良好な結果を得た症例を経験したので報告する。

症 例

患 者：54歳 女性。

初 診：平成3年1月■日。

主 訴：左側舌縁部の疼痛。

既往歴・家族歴：特記すべき事項なし。

現病歴：平成2年10月頃より左側舌縁に10×10 mmの潰瘍に気づくも、疼痛がないため放置。11月中旬、近医歯科医院にて上顎義歯作製時に同部の潰瘍を指摘され軟膏を塗布していたが症状の改善が認められないため、平成3年1月■日、近医歯科医院口腔外科を受診した。1月■日、Biopsyの結果、扁平上皮癌と診断され、1月■日当科を紹介され来科した。

現 症

全身所見：体格は中等度で、栄養状態は良好であった。

口腔外所見：顔貌は左右対称で、所属リンパ節は触知しなかった。

口腔内所見：左側舌縁に、20×20 mmの膨隆型の潰瘍

写真1 初診時の口腔内写真

を認めた(写真1)。

病理組織学的所見：表面は比較的平坦で、筋層の上部への癌組織の浸潤性増殖が認められ、深部への浸潤は認められなかった。また核の異型性が強い浸潤性の所見が認められ、比較的分化のよい角化性扁平上皮癌であった。

病理組織学的診断：扁平上皮癌。

処置および経過：平成3年1月■日入院の上、1月■日より■日まで CPE 化学療法 (CDDP, PEP, Etoposide) 第1クールを行った。

潰瘍は第1クール終了後14日目より著明に縮小した。副作用としては軽度の貧血および脱毛が認められた。貧血の回復を待ち2月■日 NLA 全身麻酔下に腫瘍切除術および Zeno の方法²⁾に従い、Sliding Posterior Tongue Flap を適用した(図1)。術後、CPE化学療法第2クール(4月2～8日)を行った。化学療法第2クール終了後、重度の血液毒性が認められたが経日的に回復し、平成3年5月■日に退院した。術後1年5か月を経た現在、再発傾向などは認められず経過良好である(写真2)。

考 察

近年、口腔癌の治療成績が向上し、1次治療を終えた

滋賀医科大学歯科口腔外科学講座
(主任：吉武一貞教授)

Department of Oral and Maxillofacial Surgery,
Shiga University of Medical Science (Chief: Prof.
Kazusada Yoshitake)

受付日：平成4年8月20日

図 1 Sliding Posterior Tongue Flap の模式図
(文献²⁾より引用)

写真 2 術後 1 年 5 か月後の口腔内写真

患者に対し、どのように社会復帰を助力するか、あるいは患者の Quality of Life をいかに向上させるかが問題点となってきた。癌治療後にこれをどれだけ高いものにしようかは 1 次治療の方法と内容とともに機能的、形態的欠損の補充法であると考えられる。舌は嚥下、発音、構音、咀嚼運動に大きく関与し、味覚を司り食塊形成にも重要な働きをするため、舌癌の切除に際してはこれらの舌機能を保存し、かつ十分な安全領域を確保し切除することが望ましく、そのため形態的欠損の補充法として大胸筋皮弁、前腕皮弁などの各種皮弁による再建法^{3,4)}が試みられてきた。しかし、皮弁採取の煩雑さや血行不良により皮弁が非生着となってしまう場合もまれにあり、これが多くの口腔外科医を苦慮させている点である。今回、われわれは舌縁部扁平上皮癌に対して Sliding Posterior Tongue Flap を適用したところ、術後にわずかな舌尖の患側偏位は認められたがリハビリテーションの必要もなく舌機能および形態が良好であった。本法は口腔内での操作であり、舌本体で腫瘍切除部を修復するため大変簡便な方法である。また舌尖部を移動させないため舌機能の低下を最低限にとどめることが可能な方法であると考えられる。しかしいうまでもなく悪性腫瘍に

対する手術法であることを強く認識することが必要であり、腫瘍が T2 以下の比較的小さな症例には有効な方法であると考えられた。

結 語

1. 今回、われわれは左側舌縁部に生じた扁平上皮癌 (T2N0M0) に対し、Sliding Posterior Tongue Flap を適応した。
2. 術後、発音障害などの機能障害は認められず形態も良好である。

引用文献

- 1) 頭頸部 TNM 分類研究資料：1989 年度症例。日本 TNM 分類委員会、頭頸部小委員会、1992、19 頁。
- 2) Zeno, N. Chicarilli: Sliding Posterior Tongue Flap. *Plast Reconstr Surg* 79: 697-700 1987.
- 3) Ayrian, S.: The pectoralis major myocutaneous flap—a versatile flap for reconstruction in head and neck—. *Plast Reconstr Surg* 63: 73-81 1979.
- 4) Soutar, D.S., Scheker, L.R., et al.: The radial forearm flap: a versatile method for intraoral reconstruction. *Brit J Plast Surg* 36: 1-8 1983.